

3月19日（金）

地鎮祭に行くと、右の写真のようなものを持っていきます。「鎮物（しずめもの）」というもので、新しく建物を建てる敷地の中央の地下に埋納するものです。

この中に何が入っているのか、聞かれることがあります。

桐箱の中に七種の金属の板が入っています。その七種とは、人形（ひとがた）・鏡・長刀子・小刀子・矛・盾・水玉＝玉の形をした板ですが、神社や地域によって違いがあるようです。これらは、その土地の神様への「お供え」になるものですが、なぜ、これらのものが鎮物になるのかは、はっきりとは分かりません。推測ですが、次のような理由が挙げられます。

人形は、「生贄（いけにえ）」です。古代の土木工事では必ず「人柱」が必要で、日本書紀にも書かれています。鏡や水玉は、神を祀るためには必要不可欠なものです。三種の神器と呼ばれるものに、神、剣、勾玉があります。矛や盾は武具ですが、これを納めることによって、「私はあなたの敵ではありません」という証になります。

どのような理由があっても、要は、建物を地震や風水害などから護ってくださいという願いが込められているのは間違いのないところです。

